

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：23903

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19236

研究課題名（和文）高齢者の服薬アドヒアランスを向上させる要因の検討 服薬管理の工夫に焦点を当てて -

研究課題名（英文）Study on Factors Associated with Improving Medication Adherence in Older Adults & #8212; A Focus on their Medication Self-management Strategies

研究代表者

小山 晶子 (Koyama, Akiko)

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：30616397

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域在住高齢者への服薬支援の在り方を検討するために、彼らの服薬アドヒアランスの実際と、実施している服薬管理の工夫を明らかにするものである。

55名の地域在住高齢者を対象に、属性と服薬アドヒアランスに関する質問紙調査と、服薬管理の工夫に関する聞き取りおよび観察を行った。

服薬アドヒアランスが良好であった者は19名（34.5%）、不良であった者は36名（65.5%）であった。全対象者がなんらかの服薬管理の工夫を行っていた。服薬管理の工夫は、服薬指示を記憶する、1週間分程の薬を手元に置く、食事から服薬までを一連の流れで行う など合計で32項目が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対象者は皆、各人の生活に合わせて服薬管理の工夫を調整し、実施していた。そのため、看護師は服薬支援を行う際に、対象者の生活と服薬管理の工夫を把握した上で、これまでの取り組みをどのように改善すれば、指示通りに服薬しやすくなるかを対象者と共に検討するべきである。その際、本研究結果より得られた服薬アドヒアランス向上の一助になると思われる、薬の一包化、服薬指示の確認、服薬時間と生活パターンの調整、服薬と食事の強固な関連付けという服薬管理の工夫についても検討することが望ましいと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the current status of medication adherence in community-dwelling older adults and their medication self-management strategies in order to consider the ideal way to support them to take medicine correctly. We surveyed 55 community-dwelling older adults with a questionnaire to examine their background and medication adherence. Their medication self-management strategies were identified through observation and interviews. Of the 55 subjects examined, 19 (34.5%) had good medication adherence, while the remaining 36 (65.5%) had poor adherence. All subjects were found to have devised some form of medication self-management strategies. A total of 32 items were identified as medication self-management strategies, including "memorizing medication instructions," "storing medicines scheduled for the week in the place where the person spends most of his or her time," and "going from eating to taking medicine in a series of steps."

研究分野：高齢者看護学

キーワード：服薬管理の工夫 服薬アドヒアランス 高齢者 ビルカウント

1. 研究開始当初の背景

高齢者の多くは、複数の慢性疾患に罹患し、多剤を服用することから、正しい薬の服用は疾患コントロールを行う上で重要である。しかし高齢者は、薬を正しく服用すること(服薬アドヒアランス)を阻む要因を多く抱え、高齢者の50%は正しく服薬できないとされる¹⁾。

一方、高齢者は服薬アドヒアランスを阻む複数の要因を抱えた状況に対応しようと「服薬管理の単純化」²⁾、「リマインダーの利用」など服薬管理の工夫を行い、服薬アドヒアランス向上を目指す²⁾。しかし、先行研究の多くは高齢者の服薬管理場面を実際には確認しておらず、服薬管理の工夫は一般的な内容に留まる。

研究代表者は、高齢者の生活に組み込まれた服薬管理の工夫に着目し、服薬アドヒアランスに影響を与える要因を調査することとした。

2. 研究の目的

本研究は、地域在住高齢者を対象に訪問調査を行い、高齢者の服薬アドヒアランス向上に有効な、高齢者の生活に組み込まれた服薬管理の工夫を詳細に明らかにする。

3. 研究の方法

地域在住高齢者の属性と服薬アドヒアランスを明らかにする量的データ収集と、服薬管理の工夫を明らかにする質的データ収集を行った。

1) 調査期間

2019年7月～2020年2月

2) 調査項目

調査項目を図1に示した。

量的データ
1. 対象者の背景 年齢、性別、同居の有無、最終学歴、身体状況、 仕事の状況、食事の状況、服薬支援の有無、 薬への態度、うつ傾向(GDS5)、 認知機能(MMSE-J)、服薬指示の理解 服薬状況(薬の種類・数・内服回数/1日)
2. 服薬アドヒアランス ピルカウント法

質的データ
3. 服薬管理の工夫 状況の写真撮影、対象者からの説明のメモ

図1 調査項目

3) 対象者

対象者は、自己管理のもと1日に1剤以上の内服薬を1か月以上継続して服用する65歳以上の地域在住高齢者55名であった。

4) 分析

量的データは、二乗検定、t検定またはMann-WhitneyのU検定を用いた。
質的データは、服薬管理の工夫とその目的を抽出し、類似性に基づいて分類した。

5) 倫理的配慮

群馬大学人を対象とする医学系研究倫理審査委員会の承認を得た。対象者には研究の概要・目的・方法・取得したデータの取り扱い・個人情報の保護・調査への参加は自由意思によるものであることを口頭および文書で説明し、文書によって同意を得た。

4. 研究成果

対象者55名は、女性36名(65.5%)、平均年齢79.3歳、服薬アドヒアランスが良かった者19名(34.5%)であった(表1)。

服薬管理の工夫は、258のコードより、32の工夫が見出された。服薬指示理解と服薬の段取りの場面における服薬管理の工夫としては、服薬指示に沿って薬を仕分けする、服薬指示を記憶する、薬を飲むべき理由を見出す、服薬時間と生活パターンの調和を思慮するなど、13の工夫が挙げられた。薬の保管の場面における服薬管理の工夫としては、薬置き場を1か所に定める、薬を種類別に一括する、薬置き場として共用場所を避ける、身体機能に応じて道具を活用するなど、

表 1 対象者の属性

		全体(n=55)	良群(n=19)	不良群(n=36)	p
		人数 (%) Mean ± SD(Range)	人数 (%) Mean ± SD(Range)	人数 (%) Mean ± SD(Range)	
性別 ^a	女	36 (65.5)	12 (63.2)	24 (66.7)	.795
年齢 ^c		79.3 ± 7.3(66-99)	81.1 ± 6.0 (71-91)	78.3 ± 7.8 (66-99)	.172
同居家族 ^a	あり	44 (80.0)	16 (84.2)	28 (77.8)	.730 ^F
学歴 ^a	高卒以上	36 (65.5)	15 (78.9)	21 (58.3)	.126
仕事 ^b	あり	9 (16.4)	2 (10.5)	7 (19.4)	.473 ^F
視力 ^a	生活への障害無し	48 (87.3)	17 (89.5)	31 (86.1)	1 ^F
聴力 ^a	生活への障害無し	52 (94.5)	18 (94.7)	34 (94.4)	1 ^F
手指の巧緻性 ^a	生活への障害無し	37 (67.3)	13 (68.4)	24 (66.7)	.895
薬のおかげで体調を維持できる ^a	はい	50 (90.9)	19 (100)	31 (86.1)	.152 ^F
体調が良い日は薬を飲まなくて良い ^a	はい	12 (21.8)	2 (10.5)	10 (27.8)	.183 ^F
薬を飲むと効果を感じる ^a	はい	42 (76.4)	14 (73.7)	28 (77.8)	.749 ^F
長期間薬を飲むことは体に良くない ^a	はい	22 (40.0)	7 (36.8)	15 (41.7)	.728
薬を飲むと調子が悪くなる ^a	はい	7 (12.7)	3 (15.8)	4 (11.1)	.682 ^F
GDS5 (0-5) ^a	うつ傾向(2点以上)	22 (40.0)	9 (47.4)	13 (36.1)	.418
MMSE-J (0-30) ^c		27.2 ± 2.6(21-30)	27.9 ± 1.9 (23-30)	26.9 ± 2.9 (21-30)	.112
	24点以上 ^a	48 (87.3)	18 (94.7)	30 (83.3)	.401 ^F
薬剤種類数/日 ^c		6.1 ± 3.4(1-14)	5.3 ± 3.1 (1-12)	6.5 ± 3.5 (1-14)	.204
薬剤数/日 ^c		10.1 ± 7.3(1-30)	8.5 ± 6.1 (1-22)	10.9 ± 7.8 (1-30)	.248
服薬回数 ^c		2.6 ± 1.0(1-4)	2.6 ± 1.0 (1-4)	2.5 ± 1.0 (1-4)	.712
薬の包装形態 ^b	PTP	41 (74.5)	10 (52.6) [*]	31 (86.1) [*]	
	一包化	5 (9.1)	3 (15.8)	2 (5.6)	.025 [*]
	PTPと一包化	9 (16.4)	6 (31.6) [*]	3 (8.3) [*]	

1 a: 二乗検定 b: 二乗検定+残差分析 c: t検定 d: Mann-WhitneyのU検定 F: Fisherの直接法

2 * p < 0.05

10の工夫が挙げられた。薬の飲み忘れ対策の場面における服薬管理の工夫として、食事をとる場所に薬を置く、目につく場所や容器で薬を管理する、定期的に残薬を数えるなど、9の工夫が挙げられた。

本研究では、全対象者が何らかの服薬管理の工夫を有しており、アドヒアランスの良・不良に関わらず、彼らが日常生活の中で調整しながら服薬しようと努力していることが推察された。服薬支援を行う際、看護師は対象者の生活と服薬管理の工夫について把握した上で、これまで取り組んできた服薬管理の工夫をどのように改善すれば、指示通りに服薬しやすくなるか、対象者と共に彼らの生活状況を確認しながら検討するべきである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小山晶子, 小山智史, 伊東美緒, 紫村明弘, 福嶋若菜, 山崎恒夫, 内田陽子	4. 巻 42
2. 論文標題 地域在住高齢者の服薬管理の工夫と服薬アドヒアランス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 176-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.42.176	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------